



貝原守一医学振興財団

会報

第1号

平成4年10月



foundation juridial person

KAIBARA MORIKAZU

MEDICAL SCIENCE

PROMOTION FOUNDATION



理事長 貝原 芳子

シンボルマーク



医学の健全な発展を願い、幅広い支援活動を通じて  
新しい人の和を育て社会への貢献に努めます。

貝原医学振興財団のシンボルマークは、「医」を象徴する十字のイメージを内包しながら、名称から連想される「貝」をデザイン化したものです。

連続する三角形のユニットひとつひとつが、人の心から心へと繋がる無限の善意であり、同時に、医学の向上する力とそれらを支援し成果を蓄積してゆく姿を表現していきます。

マーク一面に広がる貝原ブルーと清潔な白いシンボルの取り合わせは、海洋…すなわち国際性と健康なイメージを伝える色彩。人々がマークと出会ったとき、フォルムと色彩の相乗効果により、医学振興活動を通じて広く社会へ貢献する財団の理念が親しみ深く印象に残るよう願っております。

## 会報の発行に当って

医学の振興発展に寄与することを目的に財団が発足して一年半が過ぎました。

茲に第一回の財団会報を発行する運びとなりましたことは、私共関係者にとりまして大きな喜びであります。

財団発足までの数年、法人としての認可を得られるかどうか、強い不安がありました。関係者の懸命な努力と多くの方々のご助力のお蔭で、平成3年3月無事に認可を得ることが出来たのでした。

併せて、財団が発足してみますと、始めてのことであり、経験のない一同で何かと戸惑う有様でした。幸い貝原守一先生と九大医学部の同僚であります、宮崎一郎、和佐野武雄、梶屋富一の三先生が快く理事に就任していただき、深い学識と高く豊かな人生経験で、ご指導をいただき、又九大医学部長 森良一先生は、貝原守一先生と同じ細菌学教室、同じウィルス学の研究というご縁で、財団設立当初より温かいご助力とご指導をいただいている次第でありまして、ここに厚くお礼を申し上げます。

本財団の運営資金はそのほとんどを、金利によっておりますが、昨年来の金利の大幅な引下げのため、収益が減少し、発足当初予定の事業計画を変更せざるを得ない状況であります。しかし私ども関係者一同、力を併せて目的達成のため一層の努力をいたす覚悟であります。

県内の大学医学部及び医科大学の諸先生始め、医学研究施設、医療機関の諸先生の益々のご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げる次第であります。

茲に会報を作製し、一年半の歩みを回顧して、諸先生のご批判をも仰ぎ、また私どもの今後の事業運営の糧ともなればと考えております。

医学の振興発展に役立つため、遅々であっても堅実な歩みを、地味であっても価値ある仕事を、小さくても水鏡を念願しつつ、第一回の会報発行の挨拶といたします。



副理事長 佐伯 清美





## 貝原守一医学振興財団設立記念式典・祝賀会



平成3年7月6日(土)

貝原守一医学振興財団設立記念式典・祝賀会が、ホテル日航福岡にて盛大に挙行される。

主催者挨拶	財団副理事長	佐伯 清美
来賓の祝辞	福岡市長代理	友池 一寛
	衆議院銀議員	太田 誠一
	福岡県医師会長	桜井 日出夫
	九州大学医学部長	森 良一
	福岡銀行営業部長	藤島 正敏



財団の法人活動の説明 成瀬正治理事  
財団設立記念研究費助成金の目録贈呈

九州大学医学部	200万円
久留米大学医学部	200万円
福岡大学医学部	200万円
産業医科大学	200万円



貝原守一胸像除幕式  
貝原宗重氏及び家族一同



製作にあたられた  
高倉準一氏へ感謝状贈呈



祝宴 盛大に挙行 目出度終了

## 優良医学図書出版顕賞式・祝賀会



平成4年1月18日ホテル日航福岡に於いて九州大学名誉教授宮崎一郎先生の優良医学図書出版にたいして顕彰式及び祝賀会が開催され優雅で和気藹々として進行し、先生ご夫妻も非常にご満足の様子であった。



### 開会挨拶（岸本理事）より抜粋

ご承知の通り宮崎先生は昨年永年の研究成果をまとめられた大著「人畜共通寄生虫症」の英訳図書「Helminthics Zoonoses」を御出版なさったのでありますが、まことに見事な立派な図書であり、外国の学者からも絶賛の紹介がなされているのでございます。

この英訳本が今後長く世界の医学にまた人類の健康福祉に多大の貢献をなすものと確信いたしております。

本財団は医学の分野において、社会に貢献することを目的として設立されたのでありまして、その一つの事業として規約の中に、優良医学図書の出版を顕賞することをうたっております。

その顕賞の初回第一号の対象として、故貝原守一先生と九大医学部の同窓同級生であり、しかも財団の理事もお引きうけいでいます宮崎先生の世界的な名著書を選ばしてもらいましたことは本財団にとりまして、この上ない名誉なことと喜んでいるのでございます。



（ご出席者）

宮崎一郎先生、令夫人

九州大学医学部長 森 良一先生

九州大学歯学部長 中山宏明先生

九州大学医学部教授 多田 巧先生

開会の辞 岸本理事

祝辞 榊屋先生

賞状並びに賞金授与

佐伯副理事長より宮崎先生へ

ご挨拶 宮崎一郎先生

祝辞 森 良一先生

祝辞 中山宏明先生

祝辞 多田 巧先生

佐伯副理事長、佐伯専務理事

榊屋理事、岸本理事、東理事

成瀬理事、太田監事、貝原宗重

松崎、岩崎、江原事務局員

## 研究助成金贈呈者の選考について

感想

選考委員

九大名誉教授 和佐野 武雄



受賞者の皆さん御芽出度う存じます、心からお祝いを申し上げますと共に今後益々のご研鑽をお祈りします。

さて小生等選考の大任を仰せつかりましたが、何分にも不慣れのこともあって大変苦勞いたしました。医学関係全般からの応募とあって専門外のものが多く、限られた応募申請内容のみでは十分に理解し難い点があったり、特に関連文献の特刷でもあればもっと助かったと思います。来年度からは是非別刷をお願いしたいと思います。

今年度は福岡県内の医科大学と、大病院を対象にしたため、九大、久留米大、産業医大と福岡がんセンター、福岡小児病院、国立南福岡病院からの応募があり計34件でありましたが、福大からの応募がなかったのが残念でした。選考に当っては数回読み返し慎重を期しましたが、資料からだけでは汲みとれない部分もあって頭を悩ました。ところが選考委員が集まって討議をしていると案外意見が一致することが多く多少はホッといたしました。

文部省や厚生省その他にも応募されて供与確定の研究についてどう対処すべきかを検討しましたが、やはり優れた研究には重ねて補助しても良いと云うことで半額の補助をすることに決めました。

来年も多数の応募を期待しています。





## 平成4年度研究助成金の贈呈者、テーマ、金額

平成4年度研究助成金の贈呈者及び金額が決定。

当財団選考委員会にて公平かつ厳重なる審査が再三にわたって行われ、7月4日の理事会において下記のとおり決定した。

研究助成金交付申請者	34名
研究助成金贈呈決定者	10名
採択率	29%
助成金総額	850万円

研究者	推薦者	研究テーマ	贈呈額
九州大学医学部 心研、臨床細菌学部門 講師 西村 淳二	九州大学医学部 教授 金出 英夫	血管平滑筋の緊張、 増殖調節機構の解 明	100万円
九州大学医学部 付属病院第二外科 助手、講師 矢水 勝彦	九州大学医学部 教授 杉町 圭藏	肝移植後の動脈血 栓症に関する研究	100万円
国立病院 九州がんセンター 医師 掛地 吉弘	国立病院 九州がんセンター 病院長 太田 満夫	胃癌細胞の増殖活 性とリンパ節転移	100万円
産業医科大学 産業生態科学研究所 講師 松岡 雅人	産業医科大学 助教授 伊規須 英輝	カルニチンによる アンモニア脳症の 発症抑制	100万円
産業医科大学 大学生化学教室 大学院生 加藤 貴彦	産業医科大学 教授 東 監	発癌物質に対する 遺伝的感受性の個 体差	100万円
久留米大学医学部 第3内科 助手 中山 浩	久留米大学医学部 教授 戸嶋 裕徳	冠動脈拡張術後の 活性化単球の臨床 的意義	100万円
久留米大学医学部 助手 小田辺 修一	久留米大学医学部 教授 野中 共平	糖尿病の膵島細胞 障害機序の研究	100万円

研究者	推薦者	研究テーマ	贈呈額
九州大学医学部 解剖学教室 講師 飯田 弘	九州大学医学部 医学部長 森 良一	筋細胞の c a 2 + 結 合蛋白質 (P67) の研 究	50万円
九州大学医学部 公衆衛生学 助手 清原 千香子	九州大学医学部 教授 廣畑 富雄	癌と A H H 活性	50万円
産業医科大学第二外科 講師 光富 徹哉	産業医科大学 教授 白日 高歩	原発性肺癌におけ る P53 遺伝子異常	50万円

飯田 弘 氏、清原 千香子 氏、光富 徹哉 氏 については他機関よりの助成が行われており当財団の選考基準に抵触するが、特に優れた研究内容であるので上記の金額による助成となった。

## お 祝 い

### 選考委員

九大名誉教授 宮崎 一郎

当財団での第1回公募に対して、34の研究課題が集まり、その中から10題が選ばれました。それが皆さんの研究でして、おめでたく祝意を表します。皆さんの大きな計画に対しては、まことに微々たる援助に過ぎませんが、できるだけ有効にお使いになって、後世に残る立派な成果を挙げられるよう祈念してやみません。私も過去半世紀近く研究生活を送ってきましたが、その間いろいろな方面から研究賞を受け、その都度ファイトをもやして研究が進展したことを、なつかしく思い出します。そして、自分の研究が国外の教科書や専門書に紹介されていたり、苦勞して作成した写真や図が、そのまま転載されているのをみつけると、この年(85才)になっても、うれしいものです。皆さんのご研究が、ますます高い国際的評価を受けることを祈り、かつ確信しております。





## 選考後所感

選考委員

九大元教授 梶屋 富一



### 1. 西村 淳二：血管平滑筋の緊張、増殖調節機構の解明

高血圧、動脈硬化の発症と進展については血管平滑筋細胞の緊張あるいは増殖異常が中心的役割を演じ筋細胞の緊張あるいは増殖の調節は血管作動性物質や増殖因子によって行われる。これらの情報物質が細胞膜受容体と結合して平滑筋細胞内に伝達される。これらの物質が膜受容体に結合すると種々の細胞内シグナル伝達物質が産生され、その作用を介して収縮・弛緩・増殖等の細胞機能を発揮し、血管平滑筋細胞では細胞質  $Ca^{2+}$  濃度の増減を介して細胞機能を抑制しているとされてきた。しかしこれら物質のあるものは  $Ca^{2+}$  抑制系のみならず、直接  $Ca^{2+}$  依存性蛋白磷酸化系の  $Ca^{2+}$  感受性を変えることによって緊張を制御していることが著者らによって世界で始めて説明された。

著者は従来、世界で始めて豚冠動脈のアドレノレセプター、ヒスタミン受容体の特性を明らかにし、また世界に先駆けて顕微蛍光測光原を用いた血管平滑筋細胞の細胞質  $Ca^{2+}$  濃度直接測定法の開発に寄与するなど創造的業績を挙げて、23篇に及ぶ英文論文を発表して来た。独自に開発した Front Surface 蛍光測定法は細胞質  $Ca^{2+}$  濃度と張力の同時測定原は最も信頼性の高い方法として高く評価されている。受容体機能および細胞内伝達機構を保持し、なをかつ細胞質  $Ca^{2+}$  濃度を自由に調節できるスキンド平滑筋標本の開発も著者の業績である。

この様に先駆的独創的実験方法を開発しつつ、新知見を集積している著者の研究の将来は、期して待つべきものがある。人口の高齢化に伴い、極めて重要となった高血圧、動脈硬化症の新らしい治療法の開発にも役立つ可能性を秘めたものである。

### 2. 矢永 勝彦：肝移植後の動脈血栓症に関する研究

動脈血栓症は肝移植に際して最も恐れられる合併症の一つで、術後早期に緊急に発生し易く、再移植によるしか救命できない場合が多い。その発生頻度は成人では3%、小児では10~30%、特に乳児では30%以上

である。著者は世界の肝移植の中心ともいべきピッツバーグ大学において肝移植の臨床にたずさわり術後の肝動脈血栓症の重要性に着目し、術中の肝臓動脈血流測定の意義を明らかにし、小児移植例で術直後の本症発生の予知の可能性をました、さらに小児移植例において、保存液の改良による、肝動脈血流の増加と本症の頻度の減少を示し、肝の保存状態が本症の発生に関与することを始めて見出した。また本症が外科的合併症とは言いきれないこと、血栓小児に対する早期の血栓除去による治療ならびに移植肝の部分的血栓症につき研究を行い、これらは凡べて6篇の英文論文として報告している。

著者はその発生機序、誘因に関して研究しその早急な解明と、予防治療の進歩に寄与したいと精進中の気鋭の学者であり、その大成が期待される。

### 3、掛地 吉弘：胃癌細胞の増殖活性とリンパ節転移

癌の浸潤、転移に関する従来の研究は腫瘍径、深達度、尿管侵襲などの臨床病理学的因子を指標とするものが主体であった。近年、癌細胞の生物学的特性に着目し、増殖活性、細胞膜表面の糖鎖抗原、癌遺伝子等の面からこれらを捉えようとの試みが始まったのは当然のことである。

著者は、①増殖期にある細胞の核抗原に対するモノクローナル抗体Ki-67と核小体形成部位の好銀性関連蛋白AgNORs、を増殖活性の指標として、増殖活性の高い細胞集団がリンパ節転移を起こし易いこと、②Lectinの一種であるHelix Pomatia Agglutinin (HPA)を用いた免疫染色で、癌細胞膜の糖鎖抗原に変化のあるものはリンパ節転移を起こし易いこと、③癌抑制遺伝子p53に変異があり、p53異常蛋白の産生がみられるものはリンパ節転移を起し易い事を見出して内外で報告して来た。

さらに現在、p53異常蛋白のみられる細胞は増殖活性が高くなっている事を見出している、加えて新たに、

- ① 手術前の胃癌生検標本から増殖活性、癌遺伝子の変化をとらえ、臨床像、予後との関係を明らかにし、治療に応用する。
- ② 早期胃癌でありながら再発した症例の増殖活性 遺伝子変化を調べ治療に応用の可能性を検討し
- ③ 進行した症例が多い Borrmann 4型胃癌について増殖活性と浸潤・転移・予後との関係を明らかにし、手術後の Follow up に feed back せんとしている。

従来 九州では学外での研究が不活発であることを飽きたりなく思われていたが 著者が学外にあって斯様に優れた研究を続けている事に深く敬



意を表し益々の研鑽と大成を念ずると共に病院・厚生省の深い理解と大いなる援助を切望し度い。

#### 4、松岡 雅人：カルニチンによるアンモニア脳症の発症抑制に関する研究

肥料製造 化学工業等を始めアンモニア中毒は産業医学において重要であるばかりでなく 日常臨床においても肝性昏睡に代表される肝疾患時の中枢神経障害の診療に関しても重要な意義を有する。著者は既にエチレンオキシド、アクリルアミド等の神経毒の作用機序に関して優れた研究を行い その成果は国際一流誌に掲載されている。近年カルニチンのアンモニア毒性抑制作用の報告があるが反論もあり確認されていない。著者は動物に酢酸アンモニアを投与して高アンモニア血症を起こさせると痙攣発作、昏睡等の中枢神経症状を発し 脳エネルギー代謝も用量依存性に傷害されることをみとめ、これにカルニチンを前投与しておくことと痙攣発作回数の減少と共に脳エネルギー代謝障害も軽減される事を見とめた。この毒性抑制効果が脳ミトコンドリア機能改善効果による可能性に着目し毒性抑制効果の機序を解明せんとしている。

産業医学のみならず臨床医学的にも極めて重要な研究でありその成果が期待される。

#### 5、加藤 貴彦：発癌物質に対する遺伝的感受性の個体差に関する研究

ヒト発癌の大きな要因は生活環境中に存在する化学物質であると考えられるが ホスト側の要因としてその遺伝的感受性を検討することは発癌予防のためにも極めて重要である。著者は化学物質を活性化するチトクローム P 450 と不活性化するグルタチオン-S-トランスフェラーゼを指標としてその遺伝的多型を解析し 健常者 癌患者群の疫学データに基づいて個々の癌危険度を算出し 遺伝的解析と対照することによって発癌における個体の遺伝的感受性と環境との相互作用を検討せんとしている。近年発達したDNA解析法を駆使しており 発癌予防における個々人の差異を見極める為の貴重な成果を得ることが期待される。

#### 6、中山 浩：冠動脈拡張術後の活性化単球の臨床的意義に関する研究

経皮的冠動脈拡張術 (PTCA) の普及と共に術後約 30% に急性冠閉塞や再狭窄の合併が認められ新たな問題となっている。動脈硬化巣に見られる泡沫細胞は単球が分化した塊細胞が変性した LDL を取り込んだ物で



ある事が証明されており、単球、食細胞と血管内皮と、平滑筋細胞との相互作用は硬化進展の第一段階であるとされている。著者はPTCA症例を虚血再灌流の臨床モデルであるとしてバルーン拡張による機械的刺激による血管内皮傷害および冠閉塞解除後の再酸素化による活性酸素の生成、単球活性化が内皮細胞の機能障害を増悪させると推測した。短時間虚血・再灌流の臨床モデルであるPTCA施行例で単球活性化の有無を検討しその病態生理学的役割からPTCA後の急性冠閉塞・再狭窄との関連を考察することとした。条件を同一にするため左冠動脈前下行枝に狭窄を有する特機的PTCA適応20例を対象とし、通常の冠動脈造影のみの15例を比較検討せんとしている。著者は単球表面に出現する膜抗原に対して選択的親和性を有する蛍光標識モノクローナル抗体 CD11b を加えこれをフローサイトメトリーにて解析し、得られた平均蛍光強度を単球活性化の指標とするなど斬新な方法を考案して研究を進めており、その一部は既に米国心臓協会で報告している。(専門誌に投稿中)さらにLDLの変性に関係するMalondialdehydeを定量し血小板由来増強因子やInterleikin-1 $\beta$ の定量をも加えて多面的に本問題の研究を展開させており日本でも癌とともに死因の上位に浮上した虚血性心臓病の診療に大きな成果が期待される。

#### 7. 小田辺 修一：糖尿病の膵島細胞傷害機序の研究

インスリン依存型糖尿病(IDDM)は自己免疫機序によるインスリン分泌細胞( $\beta$ 細胞)の破壊によって発症する。本病膵島病変の特徴はリンパ球・マクロファージの浸潤と体の $\beta$ 細胞の消失であり、残存 $\beta$ 細胞には主要組織適合抗原(MHC抗原)の増強がある。本病変にはサイトカインが関与し、中でもインターフェロン- $\gamma$ (IFN- $\gamma$ )と腫瘍壊死因子(TNF)とを同時に作用させるとMHC-class-II抗原の発現と細胞障害を来す。著者らはこれらサイトカインの膵島細胞のNAD含量の減少が細胞障害関与するとして国際専門誌に報告した。さらにIFN- $\gamma$ とTNFが $\beta$ 細胞に選択的に作用する機序について研究を進めた。突然変異マウス由来の $\gamma$ 細胞素を用いてインターロイキン-1 $\beta$ (IL-1 $\beta$ )の刺激によって $\beta$ 細胞自体がTNF-2/TNF-2を産生する事を見出し、このTNFが直接 $\beta$ 細胞障害の原因となるだけでなく $\beta$ 細胞のMHC抗原を増強して自己免疫反応を増幅する一種の自殺機序を発動させると考え、細胞原はIL-1 $\beta$ で刺激してもTNFを産生しなかったため、 $\beta$ 細胞選択性もTNF産生能の有無によって理解されることとした。

さらに計画中の研究も極めて合理的かつ斬新な諸方法を用いて更なる解明を期しておりその成果が切望される。

#### 8、飯田 弘：筋細胞の $Ca^{2+}$ 結合蛋白質 (p67) の研究

器官培養法による生体膜の動的変化を電子顕微鏡的に追跡することから氏の研究が始まっている。成熟動物切り出し心筋からの単離細胞を培養する方法を開発し 従来の胎仔、新生児心筋培養法では不可能であった実験系を確立した、心房性ナトリウム利尿ペプチドの合成・分泌・調節機構の解析を始めとして国際的に高い評価を得た一連の業績を挙げている。更に最新の細胞生物学的研究方法を加えて 細胞機能蛋白の分離・精製・性状同定を行い、ウシ心筋から微量の未知の  $Ca^{2+}$  結合蛋白 p67 の精製同定に成功、その局在・分子形態・膜結合様式・その筋細胞膜における機能の解明へと進んでいる。更に遺伝子クローニングなど分子生物学的手法を駆使した研究へと進めている。将来性ある研究と謂うべきである。

#### 9、清原 千香子：肺癌の感受性における Aryl hydrocarbon hydroxylase (AHH) 活性の役割に関する研究

肺癌の疫学的研究は多数あり、その原因としては喫煙が最重視されていることは周知の通りである、他方個体の感受性を考えた研究は、世界的に見ても甚だ稀である。著者は9年間に亘って環境中の発癌性物質の代謝を活性化する AHH (芳香族炭化水素水酸化酵素) 活性の研究を行い20篇に及ぶ論文が国際誌に掲載されている。

さらに AHH 活性、DNA 中のAHHを支配する P450 1A1遺伝子の制限酵素による切断断片長の多型パターン、喫煙を中心とする生活様式、肺癌組織型 との関連を検討せんとしており 国際的に見ても獨創性の高い研究である。AHH 活性測定法は技術的に容易でない由であるが著者はこの方面の経験を既に9年間に亘って積んで居り 再現性の高い結果を得ている事が知られ その成果が期待される。





10. 光富 敬哉：原発性肺癌における p53 遺伝子の突然変異と臨床病理学的特徴との関連に関する研究

従来 肺癌の治療方針の決定は組織型、病期によって決定されて来た。著者は米国 NIH-NCI 海軍腫瘍研究機関において2年間肺癌の分子生物学的研究に従事した後 帰学 外科教室において年間60-70例の肺癌手術を行っている。肺癌の治療面での進歩が殆ど皆無の状況にあることに慨嘆し、肺癌の生物学的特性に基づいた治療を行うべしとして、先ず p53 遺伝子異常の有無に着目し その多様性について詳細に解析せんとしている。本人の手術経験を踏まえて生物学的特性を実用に供せんする研究であってその成果が期待されるものである。

以上10篇の研究の他にも24篇、合計34篇の応募があり 何れも主任教授のご推薦にふさわしく 優れたものであり、兄たり難く弟たり難いものばかりであったが、数名の選考委員 相集い慎重審議の結果上記10篇を授賞対象と決定した。

金額の多少は「他機関よりの助成が行われており当財団の選考基準に抵触するが」特にすぐれた研究であるので 授賞を決定したものであり 若干の差をつけたものであって 研究の優秀性とは無関係である事を附言しておく。

評者は既に81才、現在の格段に進歩した研究方法の詳細を 真に理解し得たかについては甚だ心もとなく思っている、誤解の点あれば ご遠慮なく当財団氣付で御叱正を賜りたい。





## 青藍会（九大医学部細菌学教室同門会）

### に貝原守一賞を創設

九州大学医学部 細菌学教室 教授

天児 和輔



九州大学医学部細菌学教室の同門会は、青藍会と呼ばれ故戸田忠雄名誉教授が設立され、毎年集談会を開いており、本年度で55回を数えます。

貝原守一先生もその一員で、戸田先生の助教授として、ご活躍なされていたと聞きます。その名声は、全く面識の無い私の世代でも、先輩よりしばしば聞かされ、たいへん身近な方との印象を持っております。

財団の設立の折り、教室出身のこの秀才を記念しての研究奨励賞を考え、財団をお願いいたしましたところ快くお引き受け頂き、青藍会員原賞として本年度より発足することとなりました。優秀な研究を発表した同門の若手の研究者を表彰するのが趣旨です。本年度は、福岡大学筑紫病院小児科の諸岡達也博士の論文を受賞論文として選定いたしました。カンピロバクターの感染に運動性が不可欠な要素であることを世界に先駆けて明らかにした研究です。



## 第1回助成金受領者のたより

九州大学医学部 細菌学教室

藤本 秀士

九月より米国に留学するため、いつになく慌ただしい毎日を送っています。準備の参考になればと、23年前にヒューストンにいた叔父の当時の話を聞き、留学もだいぶ様変わりしたと感じました。航空便で数週間かかった現地との連絡もフアクシミリのお陰で数日で済みます。海外赴任者が多くなったため、手引書が多数出版され、引っ越しは勿論、現地での医療保険、自動車保険、子供の教育（塾、教材）からお土産まで、お金さえ出せば手配してくれる世の中になりました。しかしアポロガ初めて月に着陸し、日本の目標であったアメリカは、現在、犯罪や暴動、エイズなど病んだ印象を与えます。1ドル360円の時代は、円高の今、想像が出来ません。叔父のいた頃の古き良きアメリカはもう無くなってしまったのか、この機会に、この目で見てきたいと思います。



九州大学医学部第三内科  
関 屋 健 策

今日、日本人の人口構成は急速に高齢化の道をたどり、2007年には65才以上の高齢者が全人口の20%に達すると予測されています。この人口構成の高齢化に伴い、痴呆性疾患の著増が見られ、65歳以上の痴呆性老人数は1990年の約100万人から2025年には約330万人と、3.3倍に増加する事が推測されております。老化に伴う痴呆や中年期に発症する痴呆症は、治療、看護など医療面のみだけでなく、社会的にも重大な問題となっており、その病因、病態の解明は、緊急を要する課題と考えられます。一方、脳機能に関しては、未だ殆ど明らかにされてなく、医学に残された最後の、かつ最大の未知の領域です。このたび、私たちの“老化における脳内 neuropeptide 及び脳内 steroid hormon の生理的意義に関する研究”に、貝原守一医学振興財団より第一回助成金を頂きました。私達は、脳とその障害状態である痴呆性疾患という未知のフロンティアで、時として迷子になった様な感じを抱きながら、健やかな老後をめざして、日夜たゆまず頑張っております。最後に、貝原守一医学振興財団の皆様深く感謝いたしますと共に、当財団の益々の御発展を祈念致します。

脳卒中という病気は元気な人に突然起こり、あっという間に死んでしまう。網走の田舎で開業していた私の祖父も客を接待した直後に脳出血で倒れ、65歳であっけなく亡くなった。一方で、無症候の小便秘を繰り返しながら、じわじわと人間としての機能を失っていく脳卒中もある。鹿児島出身の祖母はかかるタイプで、70を過ぎて次第に呆けはじめ寝たきりの状態で79歳で他界した。医学部に入ってから知ったことであるが、祖父も北大でキタキツネやクマを用いて、Meynerit 基底核などの脳の研究をしていたらしい。自分が何気なく脳卒中に興味を抱いたのは、これらが影響しているのだろうか。

さて日本人の平均寿命は年々延びつづけ、いわゆる長寿大国となった。しかし、加齢という危険因子は如何ともし難く、脳卒中やそれに伴う後遺症で悩む患者ならびに家族は後を絶たない。とくに人間である以上、脳血管障害に随伴する痴呆の発症は是非避けたい、あるいはできるだけ遅らせたいという願いは共通と思われる。私の祖父のように脳卒中でポックリいくのは最近難しい。むしろ祖母のパターンが多いのが現実である。今回は、『脳血管性痴呆の病型診断ならびに予防に関する臨床的研究』というタイトルで第1回の貝原守一医学振興財団助成金を頂いた。九大医学部の大先輩である故貝原先生の御好意を無駄にせぬよう、今後も虚住人実帰の精神で頑張りたいと思う。

おわりに、当財団の理事長（貝原芳子様）ならびにびに関係者の方々に心より深謝する。





## 貝原守一の横顔と遺稿より抜粋（その1）



昭和7年（1942）31歳

4月20日、医学部助教授を命ぜられる。この年、杉山浩太郎と Tetrabromphenolphthaleinäthylester-Karium 蛋白質定性反応の細菌学領域に於ける応用に就て、(日本医学及健康保険第3267巻)、杉山浩太郎と「培地成分の変化とツベルクリン活性」(日本臨床結核第3巻)、高木篤と「化学反応によるツベルクリンの力価検定」(日本医学及健康保険第3307巻)、「ツベルクリン活性因子の研究に関する問題」(医事公論第1571巻)を発表。

西日本新聞 昭和17年12月29日掲載

貝原守一と

### 『用薬日記』

九大助教授 貝原守一  
醫學博士

貝原守一が日本科擧の先編者として不朽の地歩を印してゐることは云ふまでもないが、彼の病跡が八十五歳の死の直前まで大々間なく綴られ、その思想が五十歳や六十歳で萎縮することもなく、年を重ねるとともにますます進歩發展してゐることは驚嘆に値する、と同時に彼の病歴がどんなにだづたかと云ふことが直に頭につかぬ。

「守一の名が養生録とともに有名なで、彼が養生録だつたことはかくれもない事實だが、彼が好んで用ひた文字が如くであり、意であつたやうに、養生の養生は不要で、あるひは不節に節力を浪費してその増加の勢をさまたげることゝ戒める點にあつたと考へてよい。いろいろの記録にうかゞはれる養生の日常や、彼の偉大な業績とそれに注がれた努力の大きさを考へると、彼が一般に考へられてゐるやうないはゆる病弱でなかつたことが想像される。

「守一の用薬日記には、養生自身が關合した藥の処方、そのたびごとを詳しく述べてあるが、これは彼の養生法の一斑を知るとともに、彼の晩年の健康状態を推測する手引ともなるものだ。

西日本新聞 昭和17年12月30日掲載

貝原守一と

### 『用薬日記』

九大助教授 貝原守一  
醫學博士

現在の用薬日記三冊は、要北四冊が七十八歳の時から、正徳二年八十三歳の時までの記録であるが、その以前にもこれに類した記録があつたかどうかはよくわからない。日記第一冊の表紙に「用薬日記『上』」とあるところから考へると、この三冊以前には用薬日記と云つけるものはなかつたのかも知れない。

「日記中の処方、養生夫人のためのものは薬類と記してあり、その他のもは、自家方と題して書かれたものがあるが、すべて自用のものだつたらしい。養生は養生前の中でも、薬、茶、糖、甘の上薬といへども別なきときは書かず、故に綱なきときは筋肉を以て養ふべしと述べてあるが、用薬日記中には、この薬、茶、糖、甘を主藥として用ひる丸の類を處方してあることが多いから、晩年はよほどその必要があつたのだらう。用薬日記が晩年になつてはじめて書かれたのも、晩年になつてはじめて、たびたび薬を用ひるやうになつたことを示すやうでもある。

西日本新聞 昭和17年12月31日掲載

貝原守一と

### 『用薬日記』

九大助教授 貝原守一  
醫學博士

尚、この日記中には處方における藥材に対する工夫、配合に關する記載とともに、その自家経験による効果についての意見が加へてあることは、養生の一生を貫く高邁な科擧精神の一端のあらはれとも考へられて興味深い。

しかし、晩年はとにかくとしても養生の日常生活が決して養生のために無味無一だつたわけではない。後述三三石を得てめた彼の學者としての社會的生活は活潑であり、日記を見ても、いろいろの文藝が毎日のやうであり、他家の要をうけ、又自分から客を招いて興をつくたことが記されてあり、たびたびの下問や、贈呈、數日も置く世傳なども、このために起つたものと考へられる點が多い。このやうな生活を経て而も長命を保つことが出来たのも、養生の効果とともに、彼が本薬師の體質ではなかつたことを考へさせる點であらう。



財団の主な事業報告（平成3年3月～4年7月）

月 日（曜日）	行 事
平成3年	
3月14日（木）	<p>今年度研究助成金を、当財団選考委員会において選考し、理事会にて3氏に各200万円の贈呈を決定。</p> <p>* 井林 雪郎 九州大学医学部第二内科 （昭和27年7月31日生） 指導教官 藤島 正敏</p> <p>* 関屋 健策 九州大学医学部第三内科 （昭和27年2月11日生） 指導教官 名和田 新</p> <p>* 藤本 秀士 九州大学医学部細菌学教室 （昭和35年2月18日生） 指導教官 天児 和暢</p>
7月 6日（土）	<p>貝原守一医学振興財団設立記念式典、祝賀会が、ホテル日航福岡にて盛大に舉行される。</p>
7月11日（木）	<p>済生会病院長小川先生に記念品（金30万円）を届け寄付金として領収され、感謝状を頂く。</p>
10月19日（木）	<p>貝原守一先生の胸像が事務局内に設置される。財団理事会開催。</p>
10月24日（木）	<p>九州大学医学部細菌学教室に、天児教授を訪問、青藍会に貝原守一賞の創設決定を報告。</p>
平成4年	
1月18日（土）	<p>宮崎一郎先生優良図書顕賞式並びに祝賀会をホテル日航福岡にて開催。</p>
1月25日（土）	<p>九州大学医学部「青藍会」佐伯副理事長出席。</p>
3月26日（木）	<p>九州大学医学部より研究助成金申請9名受理。久留米大学医学部より研究助成金申請6名受理。</p>

月 日 (曜日)	行 事
3月30日 (月)	国立病院九州がんセンターより研究助成金申請1名受理。
3月31日 (火)	産業医科大学14名 国立療養所南福岡病院1名 福岡私立こども病院感染症センター1名 研究助成金申請受理。
4月 1日 (水)	国立病院九州がんセンターより研究助成金申請1名受理。
4月 6日 (月)	研究助成申請書の受理を締め切る。計34名。
5月20日 (水)	九州大学医学部細菌学教室の天児教授に、「青藍会」貝原守一賞の賞金20万円を届ける。
5月23日 (土)	研究助成金交付選考の第1回会議、於山の上ホテル。
6月 6日 (土)	研究助成金交付選考の第2回会議、於山の上ホテル。
7月 4日 (土)	財団理事会、研究助成金交付者決定。
7月 8日 (水)	研究助成金贈呈決定者10名及び推薦者に決定通知を郵送する。
7月30日 (木)	平成4年度研究助成金贈呈式を10月3日市内山の上ホテルにて開催することを決定。

